



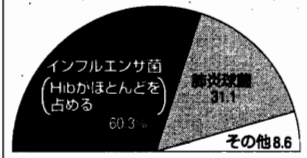
髄膜炎 ワクチンで防げ

子どものHib感染に効果

インフルエンザウイルス型(H1N1) 髄膜炎は、子どもだけでなく大人もかかり、国内で毎年約5000人から6000人の子どもがかかり、5%ほどが亡くなる。発症後には後遺症に苦しむ子どもも少なくない。かゆい目や鼻汁、熱に苦しむ子どもが増えている。治療が難しく、死亡率も高い。世界の多くの国はワクチンによる予防対策を徹底し、患者の発生を抑えている。日本はワクチンが承認されたばかりで、普及までに時間がかかると見られる。(添田孝史)

細菌性髄膜炎とワクチン

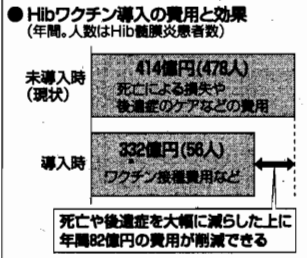
●細菌性髄膜炎の原因となった菌の割合 (生方公子・北里大学教授らの調査による)



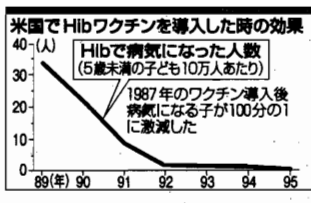
●Hibワクチンがまだ導入されていない国と地域 (06年、日本外来小児科学会のリーフレットから)



●Hibワクチン導入の費用と効果 (年間、人数はHib髄膜炎患者数)



◆患者や家族らのつらい
細菌性髄膜炎から子どもたちを守る会 (<http://www.k4.dion.ne.jp/~zuimaku/>) は、細菌性髄膜炎を経験した患者や家族を対象に初の「当事者のつらい」を開く。7月1日午後1時半から4時まで、大阪市中央区南本町2の1の8 創建本町ビル2階の大阪市民連合会議室で。参加費無料。
事前の申し込みが必要。名前、連絡先、人数を、会の代表・田中美紀さんあてメールか郵送で。
zuimakuen_net@yahoo.co.jp
〒537-0022大阪市東成区中本4の1の11の301



「自費・任意」普及これから

「ワクチンが対策の決め手になる」と生方公子。世界保健機関(WHO)はHibワクチンの接種を勧奨し、すでに100カ国以上で使われている。米国以上では患者が激減し、Hib髄膜炎はすでに稀な病気になっているという。
日本はワクチンが月に承認されたばかりで、先進国で最も遅かった。輸入に

06年、大阪府の5カ月の男児が90歳を超える熱を出し、近所の診療所で診察を受けた。抗生物質を使ったが、熱は下がらない。機嫌が悪く、ミルクもあまり飲まなくなった。3日後、再び受診。診療所の医師はかぜではおかしいと判断して、耳鼻科総合病院(堺市)を紹介した。
同病院に来たとき、男児はくしゃみして泣き声が弱々しく、驚愕の表情を現れ始めていた。髄液検査の結果、Hibの感染による髄膜炎が判明し、すぐに入院。抗生物質を使ったり、頭になまった水を抜いたりする治療を続けた。退院まで1カ月かかった。

「初期症状は発熱、頭痛、嘔吐、下痢など。最初は見分けがつかない」と同病院小児科の武内一医師は話す。
北里大学の生方公子教授(病原微生物)らの調査によれば、00年ごろからHibの耐性菌が増え、抗生物質の飲み薬が効かず、治療が難しくなっているという。
後はいかに多くの人に接種してもらうかが鍵になる」と話す。
国立病院機構三重病院長(病原微生物)の小原(小児科)は「ワクチン接種で病気を防げるだけでなく、経済的にも見合っている。接種しない場合は、死亡によって労働力が失われ、後遺症のケア費用も必要になった。経済的損失は年約414億円。接種した場合は、1回の接種費用1千円、子ども1人に4回接種で、髄膜炎患者の経済的損失を含めると総額年約82億円の削減が期待できる」と主張する。
Hibと肺炎球菌のワクチンについて、田中さんは「Hibも肺炎球菌も同じように法律をもとめて市町村が費用を負担する定期接種に含め、普及させることを目指している。厚生労働省は『Hibワクチン接種の機会を踏まえて、定期接種化を検討する』と検討中だ」と語る。

Hib髄膜炎は、脳や脊髄を覆っている髄膜の中にHibが入って炎症を起こす病気で、細菌性髄膜炎の中で最も多く、約8割を占める。5歳になるまでに約2千人に1人の確率でかかる。0歳から1歳の子どもがもっともかかりやすい。早期に診断できて抗生物質を与えても、治療が進まないほど速く進行するタイプもある。5%が死

週刊 しゃかほん 50冊

定価490円(税込) 送料等サービス定価290円(税込)

●歴史パノラマ
●人物日本史
●お金と経済の不思議
●国際社会と世界地理
●現代日本の社会と文化
●世界びっくり新聞・しゃかほんクラブ

2号-9号 特別付録 歴史人物カードカルタ

伊藤育雄 (東京都立東中学校教諭) 内田正徳 (富士見中学 高等学校教諭)
藤越泰彦 (京市中学 高等学校教諭) 山口正 (筑波大学附属中学校教諭)

(朝日新聞社)